



12年前日記

2000年1月6日（木）

山田夫妻

『12年前日記 2000年1月6日(木)』

【2000年1月6日(木)】*2012年1月6日(金)記

10時、起床。280Bに8連泊目。念のために、今日も内務省に電話を掛けるがやはり生タイ語なのでそっと受話器をガチャ切り。

10時30分、ホテルを出て、早めの4日連続昼マックで(100B)。気持ちを落ち着けるため、セブンイレブンで(13B)。

14時、内務省に突撃。(本当は内務省1から内務省2に移動したらしく、ツウクツウク(30B)やメータータクシーの往復(60B、70B)が書いてあるが、それだけじゃ、何も思い出せない。内務省2の記憶はまったくない。きっと10年前はこんなことを死ぬまで絶対忘れるわけがないと思って詳細を書かなかっただろうが、きれいさっぱり記憶欠落。よっぽど嫌なことがあったのかしらん)

やはり電話ではラチがあかないので、日本で言えば霞ヶ関みたいな内務省本丸に突撃。門番の警備員だか兵隊さんだかに、頭に天辺に会わせろ、日本代表の戦場ジャーナリストだ、気分は親善大使でトップ会談だ。まず軍人さんに変な迷子がありましたよって感じで、雑魚というか、ペーパーがいっぱいいる部屋に連行される。

もう一度許可証が欲しい旨をトークと紙を渡して、伝える。あまりお客さんが来ないのか、暇なのか、みんなで俺を見ながら、紙を振り回して、ゴチャゴチャ話しているが、たぶん俺の言ったことは通じてないと思うよ。正解!だって、その後、こっちは下っ端は忙しいんだという結論でまとまったらしく、もっと暇そうな管理職にたらい回ししちゃうって感じで大きい個室の偉そうな人に連行される。

いい日本語で言えば、わらしべ長者っぽいだが、悪い日本語で言えば、たらい回しって言うんだぜとウィンク。

「難民キャンプの取材許可証が欲しいとかいう、なんか訳のわからない日本人が迷い込んできました」と耳打ちして下っ端はさがる。

笑顔で対峙するふたり。

まんじゅうとか持ってきて、箱の下に小判でも入れておけばよかったと思ったがとき既に遅し。そもそも袖の下貰いたい格好している。すごい適当な格好、もちろんスーツなんか持って来ないので、ランボースタイルにナイトマーケットで入手したチェンマイ産の麻の黄土色した長袖のシャツを羽織ってきた。ボロは着てても心は錦。

適当なタイ語と日本語と英語のちゃんぽんで、サワディーカー、ノ～アポイントメント、気にするな。と趣旨を伝える。

さすが先程のペーパーどもよりは出世頭、笑顔でうなずくと多くは語らず、紙にペンをさらさらと走らす。「ここに行きたまえ、ミスター〇〇に会いなさい、悪いようにはしないよ。一応、行く前に電話して、アポイントメントを取りなさい」みたいな感じで、わらしべ長者的たらい回し。

お礼にズボンを脱いで、クルリと振り向いて、突き上げたお尻をフリフリした方がいいのかしらと迷っていると、いつまでココにいるつもりだ、早く帰りたまえと身振り手振り。

その身振り手振りは日本では主に野良犬や野良猫を追っ払うときの仕草。まあ、ところ変われば、タイに変われば、その仕草の意味もガラリ変わることもあるでしょうが。

まあ、郷に入れば郷に従えでシッシッとポーズを取って、さいならしたら、ムツとした顔してやんの、ば〜か。

その後、名刺だか住所らしきが書かれた紙切れを手渡されて、タイでたらい回しのはじまりはじまり。

以下、分かりにくかった武士用。

自称プロ戦場特派員バカとでも言うべきタワケモノ。もはやこれまでと直々に乗り込むと見えて、赤穂浪士の討ち入りさながら、いつもの昼行灯の仮面をかなぐりすてて、内務省に向け、これいざ進まん。

下見の賜物で迷わずに内務省の正門前に立つ。正門の受付におりし、タイ軍の兵隊らしきもの、エド言葉もげさず、鬼畜言葉もげさぬ天晴れな態度ゆえ、『指差しタイ語』なる書物を取りいだしたれば「日本」（タイ語で）、「ジャーナリスト」（タイ語で）と順に折り目をつけたりし頁をめくって指差し、最後に己を指差し、頷きたれば、はて、これ彼の軍人もようようげしたる様子にて、我を引き連れてある部屋に通す。

我曰く「ビルマのカレン族の難民キャンプの取材がしたいからチェックパス、ちょんまげ」というのを、まずタイ語で「●●●、ちょんまげ」、続いて英語で「Hello, my name is yamadafusai. I am Japanese journalist. I want check pass of Karen 難民 camp. なぜならば I want to 取材 of ビルマの軍事政権に迫害されて、タイ側に逃げてきたカレン族の人たちを」。この大部屋には10人ばかり人がおれば、ヒソヒソ相談していた、そのうちの一人が貧乏くじひいちゃった顔にて進み出て、薄暗い廊下を抜けた奥まった部屋の扉の前に連れて行き、ノックして扉を開けたれば、シャネルのご紋がデカデカとつきたるめがねをしたえらい大層に生意気ななりして、「ここじゃねえ」と紙切れにスラスラタイ語を書きたり、「ココに行けばいい。今度はちゃんと電話でアポイントメントをとるんだぞ」と渡し、ぬかしやがる。

いたしかたなければ、我、その住所の書きたるところにイカンとて、禁止乗物メータータクシーを拾っていく。さて、早くも、その住所の書きたるところに行き着く。また先程の口上にて挨拶を申し上げるも、かの人、江戸言葉も南蛮語も鬼畜語も不得手と見えて、よく通じぬゆえ、互いに書き物にしたためつつ、話をす。どうやら、またココでもないゆえ、またしても新しき住所と電話番号を渡しけり。

「まず、ミスタータンドラーに電話なさい」と言い添えて。冷たいたらい回しもやさしいたらい回しもたらい回しに貴賤なし。さて、もはやその刻、●（5時）に近づきたれば、ミスタータンドラーなるモノに電話しくさるは明日のことと思ひし、山田夫妻なるモノ、またメータータクシ

一でホテルに横付けし、読者をしくさる。

完璧に下準備をしてきた俺がこんな目に会うのはおかしいもん、絶対。そもそもガキの使いの朝飯前のことだぜ、取材許可証を貰うなんて。本番は従軍取材と難民キャンプ取材なんだから。

こんなところでまごまごしている暇はない。あの日々を無駄にできない。

大臣か事務次官に直談判。しかも難民キャンプのパスくれって。狂ってる。ある意味精力的な行動力。努力の方向性が明後日や明々後日の方向どころか、次元を超えた方向を向いてる。唯一自分で笑った過去の自分の行動。「アホだ、コイツ」。

かばうわけじゃないけど、彼だって、一応下調べしたんだから、日本人のカレン族義勇兵に難民キャンプなんてヒョイって勝手に入れますよって。そうかと思っていたが国連難民高等弁務官事務所と国境なき医師団にチェックパスがありますけど、別にどこからでも入れます。ただ入るだけならばれないし問題ないと思いますけど、取材や撮影するんですよね？ ええ、まあ、自称プロ戦場特派員ですから、今初取材中の。

取材と資料を当った結論、子供とか寄ってくるし、すぐばれちゃう可能性が高い。賄賂とか袖の下送れば見逃して貰えますが。正規の方法で取材パス貰ったほうが安上がり。

重大なミス1、要はケチったわけよ。

その2、言いたくない、まだ、個人で取れない。てか、内務省で取れるというよく考えると内務省のどの部署に行けばいいとかまったく知らなかったし、内務省行けば分かるっしょくらい。

その3、個人で申請して許可されるのは難しい。ボランティア団体が集団で申請しても3週間近くかかる。当時は当然知らない。知ってたら、さすがにもっとマシな行動を。なんで医者やボランティアに発行されるもんが特派員に発行されないわけがない。政府の特命密名を帯びているからね。

16時30分、気持ちを静めるため、セブンイレブン（18B）に立ち寄り、ホテルに戻る。

19時、タイの夕飯（37B）、（手紙だと8番ラーメン（140B）になってるけど）。滞在23日目にして、ようやく半歩前進を祝して、コーヒー（25B）でひとり乾杯。まだまだ前途多難の予感すれど千里の道も一歩から。小さい風穴でも開きさえすれば、後は雪崩を打ったように爆進できるはず。はちの一刺し。

21時、ホテル戻り。

1時30分、膝栗毛を読んで、就寝。眠りにつく。心機一転、お引越しをする夢を見ますように。

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ〜。

『12年前日記 2000年1月6日(木)』

<http://p.booklog.jp/book/41972>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41972>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41972>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.